

こころの玉手箱



不思議な響きにあたり
 一帯が包み込まれる

チベットの「祈りの器」

学校のあるムスリーとい
 う町は、1959年にガラ
 イ・ラマがチベッ
 トを脱出した際に
 逗留し、最初にネ
 ルー首相と会談し
 た町である。その
 縁で法王はしばし
 ばこの学校を訪問
 しており、生徒た
 ちも亡命政権が置
 かれたタラムサラ
 という町へ1週間
 の「修学旅行」に

日本によく見る仏具「お
 りん」に似ているが、チー
 ンと打ち鳴らすのではな
 く、木製の棒で外周をそつ
 と撫でて回す。すると小さ
 な音が次第に増幅され、ま
 るで宇宙音のような不思議
 な響きにあたり一帯が包み
 込まれる。「チベットの歌
 うボウル」とも称され、昨
 今の瞑想ブームで量産品が
 出回っているようだが、こ
 れは30年近く前にわたしで
 はなく長女がインドで購入
 してきたものだ。

なせインドか。わが家の
 娘が2人ともインドの山奥
 学校のあるムスリーとい
 う町は、1959年にガラ
 イ・ラマがチベッ
 トを脱出した際に
 逗留し、最初にネ
 ルー首相と会談し
 た町である。その
 縁で法王はしばし
 ばこの学校を訪問
 しており、生徒た
 ちも亡命政権が置
 かれたタラムサラ
 という町へ1週間
 の「修学旅行」に

にある中学高校で育ったか
 らである。19世紀から続く
 伝統ある寄宿学校で、かつ
 てはアジア各国に送り出さ
 れた宣教師たちの子弟を預
 かって教育していたが、今
 では欧米だけでなくアジア
 やインド国内からも学生を
 受け入れている。学力も伸
 びるし、心身の健康にもい
 い。キリスト教をベースに
 した学校だが、異文化との
 接触も豊かで、人間として
 も大きく成長できたように
 思う。

「心を落ち着けて」娘の思い

行くなどの交流がある。長
 女もその町でこれを買って
 きてくれたのである。

まだEメールも未発達な
 頃で、娘たちは学期休みに
 年2回帰省するものの、そ
 れ以外は週に1度の手紙が
 ほとんど唯一の通信手段だ
 った。ホームシックにかか
 らないようにと、電話も緊
 急時以外は禁止。子どもた
 ちだけで国際便の飛行機に
 乗せたり帰国を待ったりす
 るのも心配だった。娘はそ
 れを慮って、「心を落ち着
 かせてね」とこの祈りの器
 をくれたのだろうと思う。

幸い、2人とも無事に卒
 業してリケジョとなり、帰
 国子女としてわたしが教え
 ていた大学に入学した。当
 時は学内住宅に住んでいた
 ので、わたしも娘たちも学
 内を歩いて通勤通学した
 (キャンパスで偶然顔を合
 わせても知らんぷりされた
 けど)。この器をくれた長女
 は、卒業後アメリカの大学
 院に進んで博士号を取り、
 現在は日本で半導体関連の
 エンジニアをしている。